

● テーマ ●

# 亡命ロシア人が見た近代日本

Modern Japan in the Works of Russian Refugees



2011年1月18日（火）

● 発表者 ●

アイーダ スレイメノヴァ

Aida SULEYMENOVA

極東国立総合大学東洋学部准教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Assist. Professor, Institute of Oriental Studies, Far Eastern National University.

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

## 発表者紹介

---

アイーダ スレイメノヴァ

Aida SULEYMENOVA

極東国立総合大学東洋学部 准教授  
国際日本文化研究センター 外国人研究員

Assistant Professor, Institute of Oriental Studies, Far Eastern National University  
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

### 略 歴

平成 16 年 4 月 博士号 (Kandidat Nauk) (ロシア科学アカデミー世界文学研究所)  
平成 16 年 5 月 極東国立総合大学 東洋学部 准教授  
平成 22 年 4 月 国際日本文化研究センター 外国人研究員就任 (平成 23 年 3 月)

### 著書・論文等

2006 Госпожа Мусасино, Azbuka Press (大岡昇平『武蔵野夫人』のロシア語翻訳)  
2005 「与謝野晶子とマトベエフ」『明治の森』明治文芸講演会第 3 号  
2001 「堺市民の生活における与謝野晶子の作品」『与謝野晶子倶楽部』第 8 号

## 亡命ロシア人が見た近代日本

### はじめに

二〇〇八年に刊行された現代歌人岡井隆の『ネフスキイ』という歌集には、大正時代に日本で活躍したロシアの東洋学者・民俗学者のニコライ・ネフスキイについて次のように書かれています。

ニコライ・アレクサンドロヴィッチ・ネフスキイ（愛称コーリア）の民俗学の論文「月と不死」をよみてさまざまに心遊べる歌二十三首

あはせて、シベリヤにて死にし、N・ネフスキイの霊に捧げる

N・ネフスキイ。二〇世紀に生きて死んだ東洋学者。流暢な日本語で文を書き、柳田國男から「美文すぎる」とからかはれた。たとへば、「満月の夜流れ入る憂鬱な考へに閉ざされ人類永久の悲劇である死を思ひ、明るい月の光、姿にこの解釈を求めようと努める。」などと書いたコーリア。「毎月月が大空から姿を消して三日経て再び現れて

来る現象は死者がこの間に復活する思想を生ぜしめた。種々の民族は月の斑点も同じく不死の思想と何らかの関係を有するものと考へた。ロシア正教の教会に育ったコーリアは、イエスの三日の復活の神話を月の不死と結びつけようとしたのかも知れない。一\*

さらに、感動的な歌には、ネフスキイの名前とイメージが何度も繰り返されています。

月は人のうしろを照らし、太陽は前を照らすと人は言ひしを

なぜ昔の在日ロシア人のイメージが現代歌人の歌集に現れたのか、少し驚きましたが、ここにも近代日本文化とロシア人の関係が見られるのではないかと気づきました。両国の間にある文化と歴史について、様々な観点から考察したいと思います。

最初に、個人的なことからお話しします。近代短歌、特に与謝野鉄幹や晶子の歌と出会ったきっかけは、一九九四（平成六）年八月に京都市の代表団が晶子の詩碑の建設と文学セミナーを開催するためにウラジオストクを訪問したことでした。その詩碑は、おそらく

\* 研究に係する人物の略歴については文末参照のこと。

日本詩人のロシアにおける唯一の記念碑だと思えます。それはまた、ウラジオストクの住民たちにとっては日本文化の権化であるとも言えますが、私が近代歌人の作品に夢中になり、与謝野鉄幹・晶子の歌集、論文、翻訳等に関する研究活動を行う出発点となりました。二〇〇四年には、偶然にもウラジオストク市の一番大きなアルセーニエフ郷土史博物館で、与謝野晶子とウラジオストクの出身であるアマチュア詩人、ヴェネディクト・マトヴェエフに関する重要な資料が見つかりましたので、私の研究生活もまた少し変化しました。近代歌人とロシア詩人の間にどのような関係があったのか、なぜロシア人が日本文化に憧れていたか、このような問題について、自分の専門分野から離れて、今年一年、国際日本文化研究センターで「ロシア亡命人と近代日本」という研究をしております。

もう一つ別の方面から日露文化関係について考えたなら、直截な関係が見つかるのではないか、確かめておきたいのです。特に、ロシアという国は、日本と領土を接しているヨーロッパの唯一の国家です。日本に一番近いウラジオストクは、日本人にとっては一番近いヨーロッパの町と言えるでしょう。この町とロシア極東の地理・歴史・経済・文化が、日本やアジア太平洋領域、または全世界にどのような影響を与えたかについては、大きな研究テーマとなっていますけれども、未発見のことも多くあります。

## ウラジオストクの名前、地理と歴史について一言

ウラジオストクには歴史上、ロシア語以外に、「浦塩」、「浦潮」、「浦鼠湾」（中国語）のような名称が使われていましたが、現在は、Vladivostok、またはウラジオストクというロシア語の地名（「東方を占領せよ」という意味）となっています。この名前にはオリエンタリズムの現象が隠れているのではないかと考えております。オリエンタリズムはウラジオストクと関係があるに違いありません。

ウラジオストクの歴史を振り返ると、日本との接触が目につきます。「一八九一年にシベリア鉄道が起工されて多数の出稼ぎ労働者が日本から工事の請負としてロシアに渡ります。シベリア鉄道の建設には特に長崎を中心とする九州からの人たちが多く働いております。当時、長崎とウラジオストク間に航路があったので特に長崎の人達が多かったのです。その後、ウラジオストクには西本願寺ができます。ウラジオストクを中心に大田覚眠と言う西本願寺のお坊さんが布教師として活躍します」<sup>二</sup>。経済的、社会的な点から推測すると、この町の最盛期は二〇世紀の初めでした。「一九〇二年にウラジオストクとハバロフスク間で建設が進められていたウスリー鉄道が開通し、さらに満州里からハルピンを經由してウラジオストクに達する中東鉄道も完成するという事になりますと、交通の拠点としてのウラジオストクの地位は格段に重要なものになります。ウラジオストク

クはロシア人のみならず、中国人、朝鮮人、日本人などが活躍する東北アジアにおける国際都市になりました。一八九九年に日本も含むアジア諸国に関する教育拠点として東洋学院が設立されました」<sup>三</sup>、という歴史的な変化もありました。シベリア鉄道のおかげで、一九〇七年には、日本政府はヨーロッパへの交通航路と国際貿易の要として、横浜、神戸、関門（下関・門司）に敦賀を加えた四つの港を国営とします。敦賀は日本からウラジオストクを経由して、シベリア鉄道に乗りヨーロッパに向かうメインルートの出発地となりました。藤本和貴夫は次の通り説明しています。

当時、敦賀からウラジオストク間には週三便の連絡船があつて、ウラジオストクでそれぞれヨーロッパ行きの急行列車と連結していました。さらに一九一二年（明治四四年）に東京から敦賀への直通の寝台列車が出るようになります。これは夜に東京を出発して朝に敦賀港につくと、そのまま乗船し船中二泊でウラジオストクに着いて、そこからヨーロッパにシベリア鉄道で行くというルートが確立します。これは当時、ヨーロッパへの最短で最速のルートで、敦賀からモスクワまで一二〜一三日、ベルリンまで一四〜一五日、パリまでは一五〜一六日という短期間でヨーロッパと結んでいました。それまでは、スエズ運河をまわって行くというのが一般的で、時間も

運賃も倍以上かかっていたのです。そのためヨーロッパから日本に帰国する人はまず敦賀に降りることになり、最初の声明は敦賀新聞に載るといふ時代が続きます。四

与謝野晶子は一九一二年五月にこの旅に出て、ウラジオストク、満州、シベリアを経て、パリへと辿っています。

二〇一〇年まで極東国立総合大学、現在は極東連邦大学の母体である旧東洋学院は、ロシアにおける最初の公的な日本研究機関でした。この学院、そして大学の歴史については様々な研究が行われていますが、興味深い情報がA・デイボフスキーの論文に見られます<sup>五</sup>。時代の要望に因應するため、帝国ロシアの極東では経済的な発展と共に、教育的な構造改革が実行されました。東洋学院では、ロシアの大学における日本語教育の最初の基礎が築かれ、ユニークな日本語教育システムが開発されました。日本文学の研究は、E・スパルヴイン教授と東洋学院の卒業生であったV・メンドリンの協力により著しく進みました。

東洋学院の教員の中では、日本学科のスパルヴイン教授によってこのシステムが実行に移されました。彼は革命下でも東洋学院を守り、一九二五年には、ロシア大使館の文化担当アタッシュエとして来日し、一九三〇年まで大使館に勤務しています。その後一九三三年に亡くなるまで、満州鉄道のソ連の代表を務めました。

彼は学生時代から詩に関心を持ち、『日本の詩における日露戦争の反映』を執筆しています。一九三一年には回想録、日記、随筆、論文などを収録した著書『横目で見た日本』を日本語で刊行しました。スパルヴィン自身が、日露戦争以前に日本に留学していた時の印象を記録しています。同書で、このロシアの東洋学者は、日本の短歌についてもメモを残しました。

日本に於ける短歌は個人の要求であり、環境に対する自己の関係を表白する形式である。外界との関係は、観察と思想の練習によつて達せられる。故にこの見地から云へば、凡て日本人は詩人である。短歌は思想と感情との規律を外的に表現したものであつて、それが一般的標準の上に達しない限りは、社会的文学的意義をもたない。短歌の創作に取ることとは、一首の宗教的就業を意味する。かういふ方面はヨーロッパ人の理解しえないことであり、そして文学的価値をもつ凡ての短歌はかういふ基礎になるのであるから、短歌はヨーロッパ人にとっては、一方からはあまりに原始的に見え、他方ではあまりに高く彼等の理解を超越している。六

このような、ヨーロッパ人にとって伝統的なジャンルはわかりにくいという態度は、ロ

シアのオリエンタリズムに対する批判ではないか。この点については、またあらためて考えさせていただきたいと思えます。

さて、東洋学院の歴史へ戻ると、日本文学を専攻していたE・スパルヴィン教授の弟子、V・メンドリンの作品が日本文学の翻訳史に大きな貢献をしたことについて、一言だけ述べさせていただきます。A・デイボフスキーの論文では、「メンドリンは日本語の口語文法を始め、文語、漢文、候文、日本文学を研究した。特に日本の歴史、文学、言語学の学術用語を注意深く学び、人文科学用語の露訳に努めた。前述の『候文・日本書簡文体分析』の中で、メンドリンは日本の書き言葉の歴史、候文の文体や文法について解説し、その語彙的、形態論的、統合論的特殊性を説明して、候文と漢文の関係について論じた。このほかV・M・メンドリンは、漢文で書かれた頼山陽の『日本外史』二二巻中六巻を露訳している」<sup>七</sup>、と高く評価していますが、V・メンドリンは、その他、ロシア語の翻訳史上初めて巖谷小波（筆名、さざなみさんじん 澗山人）の『日本お伽噺』を日本語から直接翻訳したり、W・アストンの『日本文学史』にあった松尾芭蕉の俳句を百句ほど英語から翻訳したりしました。

第一次世界大戦後、文化交流はもっと高いレベルまで上がって行きます。島村抱月や松井須磨子らの芸術座がトルストイの「復活」を上演し、その中で歌われた「カチューシャの歌」が日本で流行しました。一九一五年にはツルゲーネフの「その前夜」の上演で、「ゴ

ンドラの唄」が流行することになります<sup>8</sup>。藤本和貴夫によると、「一九一七年の二月革命は日本では共感を持って迎えられますけれど、十月革命については、おそらくその行方が良く分らないということだった」<sup>9</sup>、等の考え方がありました。

当時ウラジオストクで『浦潮日報』という日本語の新聞を出しましたし、この新聞と街で活動した在留邦人のおかげで日露関係はより深まっていました。ある市民たちが、ウラジオストクに済んでいた日本人と仲良くなって、日本文化に直接に慣れていたということも強調しなければなりません。

### ロシアのジャポニズムとは？

日本へのあこがれか、日本のファッションか、ロシア風のジャポニズムともいうべき現象が「銀の時代」という時期に生まれたと言えます。来日する前に、ジャポニズムに関するE・ベリアエバ (Beljaeva, E.) の論文を拝読しました。その若い研究者はロシア風のジャポニズムとヨーロッパの発展とを結びつけて、次のように述べています。

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての年代は、ロシア文化史において「銀の時代」と呼ばれている。ロシアではプーシキン、レールモントフ、ドストエフスキー、トル

ストイが登場した一九世紀を「金の時代」、それに対し、一九世紀後半より二〇世紀にかけての時代、アフマートワ、マンデリシュタム、ツヴェターエワ、ブリュソフ、バリモントたちが活躍した時代が「銀の時代」である。当時のロシアでは日本の新しいイメージが生まれ、ロシアの人気作家や初期の詩人が著した詩・随筆・模写の中では、日本は理想郷として描出されていた。江戸後期、明治初期のきわめて装飾的な作品等が一八六七年のパリ万国展博覧会においてヨーロッパに紹介され、「日本風のもの」が流行し、美術、工芸、建築に影響を与えた。日露戦争の後も文化交流は続き、ロシアでは日本の文化、特に文学への関心が広がった。当時のロシアの人気のある雑誌は、日本の昔話や詩、伝説等が翻訳され、掲載された。

一九〇四年にアストンの『日本文学史』という価値の高い本が出版された。一九〇八年には雑誌『極光』にG・ラチンスキイの論文「日本の詩」が掲載された。その論文は後に本の形で出版された。一九一三年にペテルブルグでは日本の文学者山口茂一が二年前に行なった講義の内容も出版された。(中略)ロシア・オリエンタル協会、日露協会、東洋学協会、ロシア考古学協会、サンクト・ペテルブルグ大学などでは日本の研究が真剣に取り組まれるようになった。

一九一七年のロシア革命以前における日本文学の受容については和歌がその中心に

ある。この和歌の受容はロシア固有の出来事ではなく、世界的な日本文化紹介という流れ、ジャポニズムの中で起きた現象である。西欧からロシアへ流れ込んできた日本文学、とりわけ和歌への関心の源には、翻訳に携わった欧米の外国学者たちの仕事があり、英訳、仏訳、独訳された日本文学の作品をロシア語に重訳するところから、ロシアにおける日本文学の受容がはじまった。一〇。

右の引用文には、興味深い点が一つあります。それは、ロシアの文人たちが日本の伝統的な詩である和歌だけに関心を持っていたということです。しかも、中国の短詩や日本の俳句のユニットである漢字にあこがれていたアーネスト・フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa) や、エズラ・パウンド (Ezra Pound) のような西欧の詩人たちとは違った関心でした。エズラ・パウンドは、アーネスト・フェノロサの詩論について、「東洋と西洋の芸術の相似点を考え、また、両者を比較することに没頭した。」二、という言葉を残しています。漢字を中心として考察されていた詩論などのような深い作品は、帝国ロシアの雑誌には現れていないと言うべきです。ロシア風のジャポニズムは、浅薄でエキゾチックなイメージとなりました。S・エリセーエフ (一八八九〜一九七五)、N・コンラック (一八九一〜一九七二)、N・ネフスキイ等のような優れた日本学者たちが日本への留

学を果し、独自の仕事を開始する以前、二〇世紀のロシアでは、それほど日本文学は知られていませんでした。

象徴主義詩人V・ブリューソフとコンスタンチン・バリモントは、ロシアで初めて専門的に日本の詩を翻訳した人たちです。特に、バリモントは日本を愛し、詩を捧げ、日本語にできなくとも、詩を翻訳することに尽力しました。ペテルブルグで出版された山口茂一のロシア語による著作『日本詩歌の印象主義』に深い関心を持ち、日本の詩歌を研究しています。バリモントは無類の旅行家であり、多言語使用者であり、翻訳家であると同時に、詩人でもありました。

### K・バリモントと日本、日本文学

ロシア亡命人の中で、バリモントの初来日は一九一六年でした。当時、日本ではすでにロシアの文学はよく知られていました。特に、ドストエフスキーとトルストイの作品は、昇曙夢と尾瀬敬止の翻訳のおかげで人気になりましたし、二葉亭四迷が翻訳したツルゲーネフの『あいびき』は近代小説の新境地とされていたことも言わなければなりません。ベリアエバの論文に戻ると、「それはバリモントにとっては驚きであった。当時の日露文化交流の特徴の一つとして、日本人が主としてロシアの小説をはじめとして文学全般を良く

知っているのに、ロシア人は日本の詩しか知らなかった点がある。」三、という事情がありました。バリモン트가自ら日本の詩を翻訳する際には、山口茂一の日本詩のロシア語訳とコメントを参考にしています。では、山口茂一という翻訳家兼ロシア文学専門家とはどのような人物だったのでしょうか。これは、日露文化交流の歴史において未だ曖昧な一ページではないか、と考えております。亡命ロシア詩人で作家のV・ヤンコフスカヤの回想文によると、山口茂一はウラジオストクの出身で、あるウラジオストクの文学者との繋がりもあります。

バリモン트는日本を好きになり、熱心に日本語を勉強し、日本の詩の翻訳を始めました。ロシアに戻ってから、幾つかの印象記を新聞に発表しています。そこでは、日本が理想的なパラダイスであり、「美そのもの」であるといったイメージを伝えました。特に、彼は日本の女性たちに関心を抱きました。そして多くの日本風の俳句、短歌を作りました。日本の短歌と俳句には季語きごがあり、季節感を大切にするので、ロシア語には翻訳し難い面があります。バリモン트는よく日本の詩の心とリズムを感じとり、上手にその雰囲気伝えました。一九一六〜一七年にかけてバリモン트는たくさんの短歌と俳句を翻訳したり、自分で作ったりして、ロシア人に日本の詩、文学、文化を伝えることで活躍しました。

Япония, Ниппон, Нихон,

Основа Солнца, Корень Света,

Прими от русского поэта

Его струны певучий звон.

日本へ

日本、ニッポン、ニホン

太陽の根帯、光の根帯

受けよ、ロシア詩人から

歌のひびきを。

私はおん身の青空を愛する。

さくらの花が開くと

夏のやうに春が輝く。

すべては彫物のごとく、飾りある夢のごとく。

日本人が手から生まれたものは、  
すべてが労働の愛と  
美しい姿を有<sup>も</sup>っている。

太陽はお前を祝福した。

その美しい處女<sup>をとめ</sup>を

私は死ぬまで歌ふであらう。 一三

バリモントは「魔女の創作」というエッセーで、「ロシア語で短歌を訳すことはできない。例えば、この雪印という形をどのように写したらいいだろう。雪印はすぐ溶けて、できた滴はもう雪印ではなくて、少し似ているふわふわしている雪片も雪印ではない」と独白しています<sup>一四</sup>。

完成された国

日本には菊の花が輝く、  
夜空<sup>よぞら</sup>に星が熱い抱擁<sup>やうよう</sup>だが

切腹する唇は啞だ。――

すべての丘は、テオレムのごとく

分たれ――野には小川がせゝらぎ、

絵があり――光の洪水は

はがねの兜をも黄金のやうに見せる。

日本には、太陽の根帯には、

光が自然とかけはなれ

思想と心とに服従するやう――。

私は夢を見た、その人間はみんな詩人で

あひゞきの瞬間は歌ってるやう、

いくら熱しても――悔悟はない。――一五

最後に、興奮したロシアの詩人は、『日本を歌える』の中で、次のように日本の美意識について書いています。

日本の詩には、五行の短歌にしても三行の俳句にしても、そこに日本といふものの特色が含まれている。(中略)それを日本の詩から奪ふことは誰にもできない一六

#### D・ブルリユークの活動と日本美術

ダヴィト・ブルリユークというロシアの詩人・画家は、一九一八年にウラジーミル・マヤコフスキー、ヴァシーリー・カメンスキーとともに『未来派新聞(未来主義者新聞)』を一号のみ刊行。一九一七年までウラル地方に居住していましたが、ロシア革命の勃発に伴い、ウラジオストクに転居しました。この時代と未来派の活動は、井関正照によって次のように描写されています。

二〇年代になるとウラジオストクに新しい文化施設が生まれました。「ビ・バ・ボ」という名のコンサート、演劇施設で文学者や画家たちが活発に活動をあげ約二年間存続しました。「ビ・バ・ボ」は一種のキャバレー、芸術キャバレーだったが、地元民

によく知られた画家や文学者、芸人たちがメンバーになって、Davidブルリユークももちろんそのメンバーの一人で、最も華々しい時期にいた。彼は新年のエンターテインメントの司会を務めたりしています。一九二〇年の二月にブルリユークは舞台装置を創作した画家パリモフと共に「ビ・バ・ボ」をあとにしました。一七

ブルリユークがウラジオストクで発表した文章では、大きな関心が日本に払われています。亡命の最終目的地がアメリカであったにしても、ロシア未来主義を始めるに当たって、ロシア自体の伝統や東洋に関する興味をかなり大きな基盤としている以上、極東ロシアなかんづく日露戦争で自国を負かした日本という国への関心は相当大きなものがあつたに違いありません。ウラジオストクで書かれた最後の論文「美的日本の特徴」の中に興味深い表現があります。

日本はロシアの隣国であり、ウラジオストクから船で一日半のところにある。しかしながら、我が国の社会はこの国の文化生活について知るところは少ない。(中略) 日本は、美術については世界で最も特徴的な国である。誰もが絵画芸術に深い知識を持ち、貴族から平民に至るまですべての人々が造形芸術に対し審美眼と愛情を持って

いる。絵画は生活に最も欠かせない物なのである。日本では芸術は生活に属する物なので、「芸術にびっくりさせられる者などおらず」、芸術は理解され愛されている。しかし、人々は日常的なありふれたものとして芸術に接しているのだ。日本では、芸術は、大多数の者たちにとって職人技であり優美な家具である。一八

ウラジオストクではD・ブルリユークは「創造」という文芸グループに入り、このグループのメンバーたちは町の中で大騒ぎを起こしたり、いろいろな活動に参加したりしました。一九二〇（大正九）年一月に、「極東の未来主義者のマニフェスト」（署名は、N・アセエフ、V・パリモフ、D・ブルリユーク、ファイイン、ゴンチャール）を新聞『境にて』（“Dalyokaya okraina”）に投稿。このマニフェストでは、「全人民の偉大な終りなき未来の芸術 栄光あれ！」という革命的な宣言が聞かれました。Venedikt マトヴェーエフ（著名Marf、ロシア語で「三月」という意味）などの若い天才たちがグループに加盟しましたが、中心にいたD・ブルリユーク自身は一九二〇年の春に日本へ出立し、日本滞後はアメリカへ移住して、亡命人となりました。しかし、彼の活動と作品は、最初の亡命人バリモントとは非常に異なっています。この滞在スケジュールを手短に紹介しましょう。

「ブルリユークと画家のV・パリモフは一九二〇年一月一日にウラジオストクより御用船筑前丸で敦賀に來日。二人は富士山の写生を希望し、さっそく電車で沼津へ向かう」（『大阪毎日新聞』一九二〇年同月二日より）。一九二〇年一月一四日〜三〇日に、東京、京橋区南天馬町星製菓三階の会場で「日本に於ける最初のロシア画展覧会」が行われた。会期中、有島生馬、竹久夢二、東郷青児、岡本一平、岸田劉生らが來場した。一月一日、ブルリユークとV・パリモフは伊豆大島へ向かう。元村のミライヤという旅館に寄宿。V・パリモフの奥さんが一日に大阪に到着し、大阪の曾根崎に住むN・マトヴェーエフ宅に止宿した。一六日、ブルリユークとV・パリモフ夫妻、大阪毎日新聞本社を訪れ、二二〜二九日、大阪の三越呉服店で「日本に於ける最初のロシア画展覧会」開催。一二月五〜一一日、ブルリユークとV・パリモフは京都、高島屋呉服店三階で、「日本に於ける最初のロシア画展覧会」開催。大成功、全部の展示品から五点が売れる。同月一〇〜一六日、未来派美術協会が大阪ホテルで開催。一六日、ブルリユークら京都を出発し、横浜に到着。一八日午後、みんな（P・フィアラ夫妻とともに）小笠原の母島へ向けて出航。一九二二年三月五日、ブルリユークとV・パリモフが横浜に戻る。四月一日〜二四日、東京の上野、竹之台で個人的な展覧会を開催。四月二九日〜五月一日にブルリユークとP・フィアラが横浜に戻る。

八月一八日、ブルリユークとV・パリモフ家は横浜を出発、ニューヨークへ向かう。一九

一九二〇年に来日した画家・詩人、または「未来派の父」、この活発なD・ブルリユークは、東京・名古屋・大阪・京都で行われた未来派の展覧会のおかげである程度の成功を得ますが、来日後、日本美術の実態にすっかりしてからは、美術の状況を批判し、日本画壇にアピールしました。日本の未来派も即座に応答しています。

我が国に於いては、この絵画さへも今迄に、発表されたる作品は非常に少なく、其れの発表機関たる展覧会も無く、辛うじて、二科会の二三氏に依って、作品の発表があったのみである。然しながら、其れはあまりに幼稚にして、未来派及立体派として至立体至純なものとはあったのみである。欧州のその写真或いは原色版程度の形姿的衝動に依った模倣に過ぎなかつたのである。二〇

一九二三年にこの未来派マニフェストは、日本の画家たちに大きい影響を与えたと言わなければなりません。

D・ブルリユークは、「大島」「富士登山」という紀行文に日本の印象を書きました。

「未来派の父」であったロシア・アバンギャルドの画家・詩人がどのような印象を受けたか、話させていただきたいです。実は、ブルリユークの心身に沁みた印象的なものは富士山でした。

暖かな気候の日本には下界から見上げる富士山が暦ともなり、季節や天候、時間まで判断できるのである。富士山が青く聳え、その緑に二、三の残雪が輝いて見えるとき、それは熱い夏であり、山頂に登ることができる。「明日はフジヤマに登ろう！」と思わず呼びたくなる季節だ。逆に、やや緑がかかった澄んだ空に銀の衣をまとった山頂がくつきりと浮かぶとき、それは冬が近いことを示し、紙幣の建具をとおして冷たい風が吹き込み、「ムスメ」達の手が凍って青くなり、小さな庭につくられた金魚池に牡丹雪が美しく舞う季節の訪れを告げている。二

なぜ、富士山が未来派の父を興奮させたのか。答えは、次の通りです。キュービズムという立体未来派の代表者であったD・ブルリユークは日本の風景に拘らないまま、富士山の円錐台に夢中になっていました。革命前の作品も幾何学的な意味を持っていました。例えば、表①の詩は、均整のとれた形となっているのではないかと考えられます。



ブルリユークの日本滞在に関するロシア側の資料は非常に少ないですが、最近の研究発表のためアメリカの孫さんや、Mary Burkulk-Holt の努力によって発掘された資料により、彼の絵・詩等を通じた日本の印象が分かりやすくなりました。特に、一九二五年にアメリカに来ていた親友であったV・マヤコフスキーとの対話の中に日本の回想が浮かび上がります。

場所…ブルリユークのニューヨーク自宅

とき…一九二五年、アメリカ合衆国滞在時、V・マヤコフスキーはブルリユークに会った。

彼らは、ブルリユークのアパートの中に並べられた絵とスケッチの前で話している。\*

マヤコフスキー…うん、面白いな。(マヤコフスキーは日本を描いた色彩も内容も様々な

スケッチの前でしゃがんでいた。) あちらは空気と葉の色が違うね。

ブルリユーク…夏は霧と小雨が多くて、すべてが勢いよく育つ。お寺に続く灰色の石段、

杉で造られたお寺と海の塩分で汚れた茶色の屋根、熱帯の松のやわらかな葉…、他にも

\* 本対話のみは、榎内裕子の協力のおかげで訳された。

すべて違っている。肌の色、服装、習慣、生活の形、墨で描く伝統的な美術、温かいお酒を飲むことも、すべてだよ。三三(中略)

ブルリユーク…中国文字があまりに難しいから、過去の文化には手も足も出ないよ。現在、ヨーロッパ人の私たちは、表面をなぞっているだけだ。表面には外来の影響、外国から受けたばかりでまだ日本に定着していない影響がところどころに見られるからね。マヤコフスキー…鉄道はすぐ海沿いを通っているんだね。

ブルリユーク…須磨海岸には何代も続く漁師の家々があつて、その間を狭い小路が通っている。千年も前に、この人たちの祖先が海岸の駅近くに魚の神様を祀るお寺を建てたんだ。このあたりでお祈りをしている人々を見たことはないけど、たくさんのお祈りがまらで祈りをささげるように船首をお寺に向けているよ。三三

この親しい会話は、日本・東洋文化に対する敬意、好奇心に満ちた態度を示しているのではないか、と考えています。

### マトヴェーエフたちと日本文学

日本との絆は、ウラジオストクの未来主義者、D・ブルリユークの同志であった Venedikt

マトヴェーエフと彼の家族も強かったです。家長、ニコライ・P・マトヴェーエフ。同時代人にとっては、ニコライ・アムールスキー (Nikolay Amurskiy) の筆名の方がより有名です。日本で生まれたロシア人である彼にとっては、日本がもう一つの母国でした。専門的な教育を受けていなかったマトヴェーエフは、それを別にしても様々な分野で活躍し、自分の印刷所でいろいろな雑誌、新聞、パンフレット等を出版しました。ジャーナリスト、編集者、記者の仕事をすると同時に、他の作家を支援していました。亡命時代にも、在日ロシア人の文芸誌に寄稿したり、編集者を務めたりしました。

マトヴェーエフは自分でも詩や小品等を作ったり、日本の伝統的なジャンルをロシア語に翻訳したりしました。翻訳された短歌は、大中臣能宣おおなかとみのかずのぶ(平安時代の歌人)、文屋康秀ぶんやのやすひで、寂連じやくれん法師(平安鎌倉時代の歌人)等の作品でしたが、ニコライ・マトヴェーエフの直訳ではなくて、英語から翻訳したものでした。これはロシア語の *Бытья но Асхидя, Asuhide* であって二四。

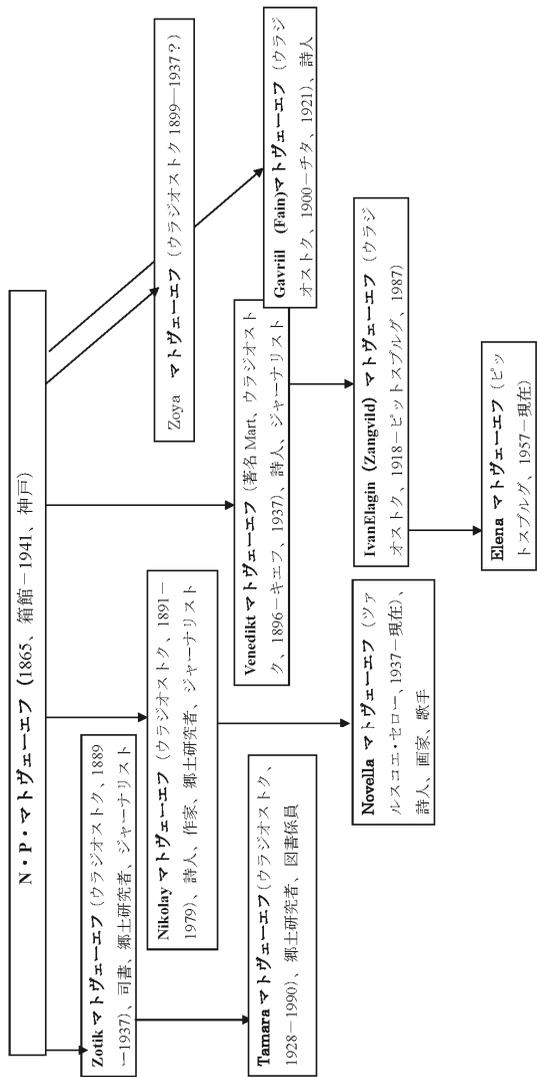
郷土史に関心を持ったマトヴェーエフは、一九一〇年、ウラジオストク開基五〇周年に向けて、『ウラジオストク市小史』を書き、出版しました。九〇年後に再版されたこの『小史』は、今日でも大変興味深く読まれています。

一九一七年、マトヴェーエフは、極東最初の社会・政治及び文学・芸術雑誌『極東の自

然と人々』を創刊し、それは一九一九年まで刊行されています。新聞『境こゝ』(“Dalyokaya Ukraina”)も編集していましたが、マトヴェーエフ自身は、反革命的な政治活動が難しい状況の中で秘密警察の監視下におかれましたので、迫害を恐れて、家族四人とともに日本へ脱出しました。ほんのしばらくの間と思われたロシアからの脱出が、実際にはロシアとの永遠の別れとなりました。

マトヴェーエフの子供と孫は皆、詩とジャーナリズムに関わっています(表②参照)。マトヴェーエフの息子たちは、地域の文化のためにそれなりの貢献をしました。長男ゾーチク(Zotik)は東洋学学院を卒業し、スパルヴィン教授の下で大学の図書・資料を収集し、書誌学に精通した文学研究者でした。次男で、ニコライ・マトヴェーエフIIボードルイイ(Nikolay Matveev-Bodryi)の筆名で知られるニコライは郷土史家・ジャーナリストとなりました(彼の個人資料の中には、マトヴェーエフ家の書類が保存されています)。ヴェネディクト(Venedikt; 筆名 Mart、三月という意味)は、十一冊の詩集を出版。ヴェネディクト、ゾーチク、次女 Zoya は三人ともスターリン時代に日本のスパイとして逮捕され、銃殺されました。しかし、マトヴェーエフ家のその次の代においても、詩才は絶えることはありませんでした。六〇年代には、N・マトヴェーエフIIボードルイイの娘ノヴェラ・マトヴェーエヴァ(Novella Matveeva)が、自作の詩と歌の作者兼歌手として有名になり

表② P・N・マトヴェーエフの家族から出た詩人と郷土研究者



ます。V・マトヴェーエフの息子I・エレーギン (Ivan Elagin) は、定評のあるロシア在外詩人で、さらに、アメリカ在住のエレーギンの娘であり、ニコライ翁の孫娘エレーナ (Elena) も面白い詩を書いています。

ヴェネディクト・マトヴェーエフと言う人物は、興味深い性格でした。D・ブルリュークの「創造」(“Tvorchestvo”) を緒に始まった詩人・画家マトヴェーエフは、一生涯にわたって様々なアバンギャルドの活動に参加しました。一九一八年に、彼は与謝野夫妻の東京の自宅を訪問していますが、この訪問も活動の一種ではなかったか、と今は考えています。

実は、日本風の作品がこの訪問の前に現れていました。一九一六年にウラジオストクで初出し、さらにペトログラッド (旧ペテルブルグ首都) で再版された『小唄』という詩集には、明治天皇の短歌 (「時計」“Chasy”) や、落合直文、与謝野鉄幹、与謝野晶子の露訳された作品が収録されています。訪問後は、父親が主宰する雑誌『極東の自然と人物』に、与謝野晶子・寛の翻訳のほか、自作の短歌のような *Tanka* と俳句のような *Haiku* も掲載しました。ロシアでは一九二〇年代まで近代の短歌と俳句はまだ知られていませんでした。N・コンラド、A・グルースキナニ五等の研究者による論文と翻訳はすでに準備されていますが、当時現れたV・マトヴェーエフの作品は不思議に思われたのではないか、と思います。

V・マトヴェーエフと現代日本歌人の印象については、二〇〇五年に出版された評論を

参照できますが、彼の翻訳について一言述べておきます。

与謝野晶子より

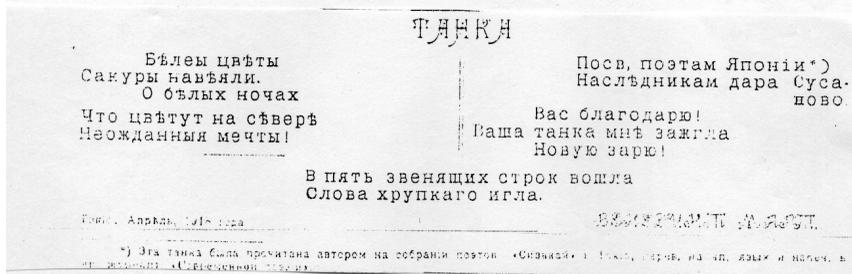
我は頭を手にもたれかけた。夢だ。夢で春を見ている。ピンと張りすぎて弦が切れた。…あつ！これは鬢の一つは切れた。二六

V・マトヴェーエフが使った言葉の中には、「うたた寝」という晶子のキーワードはないし、晶子の歌から離れた春の思いが現れています。それに、「春の夜の夢」から「夜」も失われましたので、何かの昼後の眠気が描写されているような残念な感じがします。これはやむを得ない翻訳の結果であると納得できますが、晶子の実感を少し残しているのは、うたた寝の夢見心地から琴の音で現実へという瞬間的な飛躍、つまり詩人の内部生活を電光石火の速さで照らしたことでしょう。マトヴェーエフ詩人も短い歌の反応性と可能性を分かっていたのだと思います。

V・マトヴェーエフは、未来派主義者であったにもかかわらず、父親のように日本風の作品を作りました。表③には彼の『小唄』の代表的な Tanka がありますが、左に似ている Tanka の一首を日本語、英語に訳してみました。

表③ ヴェネディクト・マトヴェーエフの Tanka

V. マトヴェエフの短歌 (1918年) \*



この短歌は詩話会で作者に詠まれ、「現代詩集」という出版物に載せられた。この短歌は詩話会で即詠され、「現代詩集」という出版物に載せられた (V. マトヴェーエフの説明)。詩話会 (シワカイ) という詩人会がどこでいつ行われていたか、不明である。

『極東の自然と人々』1918年1, 2号

桜の枝を

The branch of sakura

雀が不注意に

Was trembled by a nightingale,

撒き散らした！

Oh, it's so careless!

枝からわがままに

It spilled from branches

白い花卉を撒き落としたり！

White petals on the ground. 二七

この詩の中で、ロシア人は白雪も描写しているような感じがします。もちろん、雪に慣れている国の人は、雪に様々な色彩が見つけられます。それにしても、一九一八年に自作された *Tanka* では雪は少しだけ悲しいニュアンスを持っていますが、この自然の不定生は理解しやすいでしょう。

もう一人の翻訳家、Mikhail グリゴリエフも近代短歌を露訳しました。彼の翻訳作品には、芥川龍之介『蜘蛛の糸』『山鳴』、谷崎潤一郎『陰翳礼讃』、夏目漱石『坊ちゃん』『吾輩は猫である』『三四郎』『門』等があります。非常に綺麗なロシア語で書かれた翻訳ですが、石川啄木の短歌の訳を見て、がっかりしました。

石川啄木の『一握の砂』より

東海の小島の磯の白砂に／ われ泣きぬれて／ 蟹とたはむれ

У Восточного моря,                    У Восточного моря,

На ярких пещках                    На ярких пещках

Играю с крабом                    Играю с крабом

Я в слезах. 二八                    Я в слезах.

Mikhail Grigoriev は、歌人がわざと書いた三行詩を四行詩に変えて、韻律を入れましたが、それによって歌の構想を破ってしまいました。近代短歌の翻訳にはいろいろな方法がありますが、現在もこの特殊なニュアンス、三行詩の形の翻訳問題はまだ解決できていないようです。ロシアの読者はいつも詩にリズムを期待しますので、亡命人のグリゴリエフは、ロシア語に憧れて伝統的な弱強格 (iambus) に訴えて、啄木の歌を訳しました。しかし、彼の翻訳家・編集者としての活動は、ロシアではまだまだ評価されていないと思います。

## 結論

二〇世紀の前半に生きたロシア亡命人の生活苦、成否が走馬燈のように疾走しましたが、本発表では、幾人かの生涯と作品に限って話させていただきました。彼らは、それぞれの事情で日本にいた人たちですが、日露文化交流が彼らの活動によってより高いレベルにまで上がったことは疑いありません。

K・バリモン、D・ブルリユークは、世界に通用する人物だろう、と信じています。彼らの作品（絵、詩、紀行文等）は世界史上価値がありますので、グローバル文化に貢献しています。未だ知られざる翻訳家M・グリゴリエフもチタという小さい町の出身ですが、アジア太平洋領域で活躍した優れた人物でした。

一方、ニコライとヴェネディクト・マトヴェーエフの人生が、ロシアと日本だけではなく、ウラジオストクと日本の東京（一九一八年に与謝野夫妻の自宅があつた麹町）、関西の神戸、大阪、さらにマトヴェーエフ翁が永眠された町を親しく結んだのは信じがたい事実です。これは、「グローバル」の文化と連想させてもいいでしょう。

実は、亡命ロシア人はもともと多くの作品と回想文を残していますが、この短い発表ではすべてを紹介することができません。未定資料が新研究者を待っていると思います。手に入るものを高く評価したいです。偉大なロシア文学ではなくて、少し生嚙りのと

ころもある作品群ですが、当時の日本学の状況、翻訳の発展を振り返ると、紹介した作品には、近代日本のいろいろな面が見られるように思います。近代の日本人が現代日本人とどのように違っているのかも明らかにしています。そして、オリジナル作品の特徴を外国語の翻訳で残すことができるかできないかは、未来の仕事にかかっています。

二〇一〇年一〇月に我が大学、かつての東洋学院を前身とする、極東国立総合大学はより高いレベルに上がり、極東連邦大学となりました。二〇一三年にアジア太平洋領域サミットが行われた後は、大学施設は新キャンパスに移転することになります。我が大学の教員と学生は未来を楽しみに待っていると書いていいたいでしょう。

### 主要参考文献

藤本和貴夫、「日ロ関係 ―ピョートル大帝から現在まで―」第3回『日ロ歴史認識問題』

シンポジウムの概要、二〇〇二年 Web ページより

[http://www.nichiro.org/12\\_jigyousympo\\_2002\\_1kicyo.html](http://www.nichiro.org/12_jigyousympo_2002_1kicyo.html)

岡井隆、岡井隆著、『ネフスキー』りぶるどるしおる 66、二〇〇六年、三九五頁

沢田和彦、『白系ロシア人と日本文化』、成文社、二〇〇七年、三九〇頁

A・ディボフスキー、「極東ロシアにおける日本研究と日本語教育の行方―東洋学院（1899-1920）の日本学を中心に―」下記の Web サイトより

<http://www.researchgate.net/publication/29676387> (1899-1920)

スパルヴィン E.G. 『横目で見た日本』、新潮社、一九三一年、四六二頁

『「極東ロシアのモダニズム 1918-1928」展』、町田国際版画美術館他、東京新聞発行、二〇〇二年

Азадовский К.М., Дьяконова Е. М. Вальмонт и Япония. (К・アザドフスキー、E・デヤコノヴァ、『象徴主義の詩人コンスタンチン・バリモントと日本』、モスクワ、ナウカ出版、一九九一年、一九〇頁)

コンスタンチン・バリモント、尾瀬敬止訳『日本を歌へる』露西亞詩集誠之堂書店、一九二三年、一七〇頁

ベリアエバ (Belyaeva E.) 「ロシアのジャポニズム―19世紀終わりごろから20世紀初頭にかけて― Japonisme in Russia – end of 19 – beginning of 20 century」『社会文化科学研究』第12号 二〇〇六年、三月、一〇九―一七頁 Web サイトより

[http://www.shd.chiba-u.ac.jp/kiyou/kiyou0603\\_10.pdf](http://www.shd.chiba-u.ac.jp/kiyou/kiyou0603_10.pdf)

アーネスト・フェノロサ、エアウラ・パウンド『詩の媒体としての漢字考—アーネスト・フェノサ—エズラ／パウンド芸術詩論』高田美一訳、東京美術、一九八二年、一二九頁

水野忠夫訳、『ロシア・アバンギャルド—未完の芸術革命』PARCO 出版社、一九八五年、二五四頁

Сазанами Сандзин. Сказания древней Японии. Перевод с японского и примечания В.М. Мендрина. Спб.: Издательство Девриена, 1908. 巖谷小波)『日本昔話。上代日本の伝説』V・M・メンドリンの日本語訳、解釈、前書等 サンクトペテルブルグ、デヴィリエンの個人出版、一九〇八年、二四〇頁

Астон В. Г. История японской литературы. Перевод с английского слушателя Восточного института, подбесаула В.Мендрина. Под редакцией и.д. профессора Е. Спальвина. Владивосток, 1904. С. XII. W. Aston 『日本文学の歴史』V・M・メンドリンの日本語訳、解釈、コメント(東洋学学院紀要、第11・12巻)

井関正照 『未来派 イタリア・ロシア・日本』形文社、二〇〇三年、五八九頁

D・ブルリユーク『未来派とは？答へる』(木下秀(一郎)と共著)近代文芸評論叢書15 一九九〇年、日本図書センター、二二六頁

D・ブルリニーク 系図 на Фудзи-сан. Из жизни современной Японии.

Издательство Марии Никифоровны Бурлюк, Нью-Йорк, 1926. 『富士登山 現代日本の暮らし』鈴木明訳、私家版、改訂版二〇〇五年、三二頁

Бядаев Н. Давид Бурлюк в Америке: материалы к биографии. М.: Наука, 2007.

N・エヴダエフ『アメリカに生きたダビッド・ブルリニーク 伝説に関する資料』モスクワ、ナウカ、二〇〇七年、四六八頁

松山真一「親日亡命ロシア人ニコライ・マトヴェーエフ」『講座スラブの世界 8 スラブと日本』、弘文堂、一九九五年、一八七～二二三頁

小山内道子『月刊ロシヤ』（一九三五～一九四四）を渉猟して―雑誌の期限、そして米川文子、マトヴェーエフ、黒田乙吉を読む―中村喜和、長縄光男、ピョートル・ポダルコ編、『異郷に生きるV 在日ロシア人の足跡』成文社、二〇一〇年、二三九～二五三頁

V・マトヴェーエフ (Mart)、「現代日本の詩人」(与謝野晶子・鉄幹の訪問について)『極

東の自然と人々』一九一八年1・2号。Матвеев В. "Черный Дом", «Песенцы».

Владивосток, Чита, 1917. (『黒い家』『小唄』ウラジオストク、チタ、「境にて」出版社、一九一七年 三二頁)

スレイメノヴァ・アイダ 「与謝野寛、晶子とマトベーエフ」『明治の森』、二〇〇五年、  
『第3巻、一四〇―一七頁

小川亭作 「啄木の露訳について」『月刊ロシア』、一九三六年、十一月、八三頁

### 研究に関係する人物の略歴

ネフスキー、ニコライ・アレクサンドロヴィチ (Невский Николай Александрович, 一八九二、ヤロスラーヴリ、一九三七、レニングラード)、日本民俗学者、西夏語の研究者。一九一三年に初めて訪日した後、一九一五―一九二九年に日本に滞在。民俗学研究のかたわら小樽高等商業学校と大阪外国語学校でロシア語を教えた。帰国後「日本のスパイ」として日本人妻とともに逮捕、銃殺される。二〇〇二年に宮古島平良市でネフスキー生誕110周年記念シンポジウム開催。顕彰碑除幕。「ネフスキー通り」が制定される。

作品 岡正雄編『月と不死』東洋文庫、平凡社、一九七一年、三六一頁

『宮古方言ノート 複写本』上、下、非売品、沖縄県平良市教育委員会、二〇〇五年、

六七〇頁\*

\* 生田美智子編『資料が語るネフスキー』大阪外国語大学 二〇〇三年より

コンラド、ニコライ・ヨシフオヴィチ (Конрад Николай Иосифович、オリョール、一八九一、〜モスクワ、一九七〇)、ロシアにおける日本学の基礎を基づいた人物。一九一四〜一九一七年に東京帝国大学に留学。一九二七年に再来日。

作品 メシン、ジューコフと共著、早川二郎訳『日本歴史』叢文閣、一九三四年、一四四頁

『Большой японско-русский словарь』 под редакцией Конрада Н.И., 『大和露辞典』コンラド N・I・編、ソ連科学アカデミー、東洋学研究所一九七〇年

スパルヴィン、エヴゲーニイ・ゲンリホヴィチ (Спарвин Евгений Генрихович、一八七二、リガ近郊、一九三三、ハルビン)、日本学者。ペテルブルグ大学東洋語学部卒業。ウラジオストクの東洋学院の日本学主任教授。一八九九〜一九〇〇年に東京に留学し、一九二五〜一九三一年には駐日ソ連全権代表部通訳官、全ソ対外文化連絡協会代表をつとめた。作品 『横目で見た日本』新潮社、一九三二年、四六二頁

メンドリン、ヴァシリイ・メレンチエヴィチ (Мендлин Василий Мелентьевич、一八六六、エカテリノダル、一九二〇、ウラジオストク)、軍人、ウラジオストク東洋学学院の教

授、W. Aston 『日本文学の歴史』の露語最初翻訳家。一八八九年にモスクワ士官学校を卒業し、ザバイカルスキー軍管区へ転勤し、日露戦争の現場にも出た。一九〇一〜一九〇六年にウラジオストク東洋学学院で勉強し、一九〇三年に日本へ研修に訪問した。聖教大主教ニコライ聖のご助言で頼山陽の『日本外史』の翻訳にかけた。その他、ロシア語の翻訳史で初めて巖谷小波(筆名の漣山人)の『日本お伽噺』を直接に日本語から翻訳し、W. Aston の『日本文学史』にあった松尾芭蕉の俳句を百句位英語から翻訳した。

翻訳作品 Aston V. G. История японской литературы / Пер. сангл. В. Мендрина;

Под ред. Е. Спальвина. Владивосток, 1904. (Известия Восточного института;

T. 11-12). W. Aston 『日本文学の歴史』 V・M・メンドリンの日本語訳、解釈、コメ

ント(東洋学学院紀要 第11・12巻); Саганами Сандзин. Нихон мукаси банаши.

Сказания древней Японии / Пер. с яп. с прим. и вст. статьей В. М. Мендрина.

СПб., [1908]. 漣山人(巖谷小波)『日本昔話』にほんむかしわたり 上代日本の伝説』 V・M・メンドリ

ンの日本語訳、解釈、前書等 サンクトペテルブルグ、一九〇八年; 頼山陽『日本の

幕府史』 日本語訳、解釈、コメント V・M・メンドリン 第1〜6巻、ウラジオ

ストク、一九一〇〜一九一五年(東洋学学院紀要 第33巻2号、第36巻1号、第39巻

2号; 第50巻、60巻) Рай Дзю Сисей『または、Рай Дзё. Сисэй(頼裏子成). История

стигнута в Японии / Пер. с яп. с прим. и комм. В. М. Мендрина. Кн. 1-6.

Владивосток, 1910-1915. (Известия Восточного института; Т. 33, вып. 2; Т. 36, вып. 1; Т. 39, вып. 1; Т. 39, вып. 2; Т. 50; Т. 60).

バリモント、コンスタンティン・デイシトリエヴィチ (Вальмонт Константин Дмитриевич, 一九六七年六月一五日〜一九四二年一月二四日) はロシア象徴主義の詩人・翻訳家。「銀の時代」を代表する文人の一人である。

ヴラデーミールの貴族の家庭に生れる。一八八六年にモスクワ大学に入学するが、翌年に除籍される。一八九〇年代の末に詩作に入り、一九〇五年にいくつかの詩集を出版して文学者として名を揚げる。同年の末に非法法にロシアを脱してパリに行き、精力的に旅行を行い、一九一六年に日本でも講義をしに尋ね、同年にやっとモスクワに戻った。二を熱狂的に支持したものの、一〇月革命には反対し、ロシアを去ってドイツに行く。のち一九二〇年にフランスに亡命するが、晩年の二〇年を貧困のうちに過ごした。一九四二年の暮れにパリ郊外のノワジールグランにて死去。

作品 コンスタンチン・バリモント著、尾瀬敬止訳、『日本を歌へる』、露西亞詩集誠之堂書店、一九二三年

ブルリユーク、ダヴィト・ダヴィドヴィチ (Бурлюк Давид Давидович)、ウクライナのハリコフ、一八八二年七月二日〜ニューヨーク、一九六七年一月一五日) は、ロシア未来派の画家。ロシア未来派の中心人物の一人で、「ロシア未来派の父」と呼ばれることもある。ロシア帝国のハリコフ県に生まれる。一八九八年から一九〇四年にかけてカザンとオデッサの美術学校に通い、ミュンヘンの王立アカデミー、パリのエコール・デ・ボザールに留学した。一九一〇年代は、モスクワを中心に活躍。一九一八年には、ウラジミール・マヤコフスキー、ヴァシーリー・カメンスキーとともに「未来派新聞 (未来主義者新聞)」を一号のみ刊行。一九一七年までウラル地方に居住していたが、ロシア革命の勃発に伴いウラジオストクに転居。一九二〇年に来日。同年一〇月には、ヴィクトール・パリモフとともに、「日本に於ける最初のロシア画展」を開催 (東京京橋・星製菓株式会社。五〇〇点出品) 一九二一年、木下秀一郎と未来派の講演会を開催 (名古屋)。同年、第二回未来派美術協会展にも出品。翌年、渡米した。一九六七年、ニューヨークで没。

作品 D・ブルリユーク、木下秀 (二郎) と共著『未来派とは？答へる』近代文芸評論叢書 15、日本図書センター、一九九〇年。 D・ブルリユーク、鈴木明訳『小笠原にて記す』私家版、二〇〇一年。 D・ブルリユーク Восхождение на Фудзиган. Из

жизни современной Японии. Издательство Марии Никифоровны Бурлюк,

Нью-Йорк, 1926. 『富士登山 現代日本の暮らし』私家版、二〇〇五年

マトヴェーエフ、ニコライ・ペトロヴィチ (Маргеев Никола́й Петро́вич 1866～1941) 同時代人にはニコライ・アムールスキー (Nikolay Amurskiy) の筆名の方がより有名である。日本で、函館の政教宣教師団に勤務していた准医師に生まれた。幼くして親を失い、ウラジオストク港の修理工場付属二年制学校で、労働者の職を得た。鑄造業の型工としての専門性が、後になって彼が自分の印刷所を開く際に役立った。

一八九六年に、マトヴェーエフは、『過ぎし昔のウスリー・タイガから』と、続いて『ウスリー物語』のルポルタージュの著者を出版したが、これらの著作は、I・D・スイチン (I.D. Sytin) の出版社によってモスクワで再版されて後、全ロシア的に有名になった。二〇世紀初めにはマトヴェーエフは、大衆ための図書シリーズ「多目的文庫」の出版を始めた。一九一〇年、ウラジオストク開基五〇周年に向けて、マトヴェーエフは、『ウラジオストク市小史』を出版した。

一九一七年、マトヴェーエフは、極東最初の社会・政治及び文学・芸術雑誌『極東の自然と人々』を創刊し、それは一九一九年まで刊行された。マトヴェーエフは、『新聞』Dal'yokaya Otkraina (『境こい』) を編集していたが、社会主義者に関係する文書の発表後、検挙され

迫害を受けた。彼の雑誌は新聞同様に発禁処分を受け、作家自身は監獄で数ヶ月間過ごした。コルチャークの反革命体制時代、マトヴェーエフは秘密警察の監視下におかれた。一九一八年に彼は日本へ脱出し、晩年亡命していた。大阪、神戸でロシア語書籍の印刷・出版・販売業を営んだ。一九四一年に神戸で亡くなり、神戸外国人墓地に埋葬された。

主な作品 *Краткая история города Владивостока. Владивосток, 1910.* 平井繁訳『ウラジオストク小史』私家版、静岡県下田市、一九九四年、一一四頁

中村星湖訳『アムールスキー詩集』太田覚眠発行、一九一〇年、二二二頁

*Краткий русско-японский словарь.* Осака, книгоиздательство «Мир», 1923, 10 мая.  
〔簡易露和辞典〕大阪、「シール」出版所、一九二三年五月一〇日沢田和彦氏によると、この「シール」出版所は、マトヴェーエフが一九一九年に大阪市北区曾根崎上に  
つくったものである。〕

翻訳作品 『東洋にて』一九三五年（На Востоке», 1935）

マトヴェーエフ、ゾチック・ニコラエヴィチ（*Матвеев Зотик Николаевич*、ウラジオストク、一八八九〜ウラジオストク、一九三九）、郷土研究者、司書、ジャーナリスト、マトヴェーエフ、ニコライの長男。一九二〜一九一六年に東洋学学院で勉強し、卒業後大学の

図書館係長となった同時に、ウラジオストクの新聞、雑誌に記事、資料を載せた。一九三七年に「日本スパイ」として逮捕、銃殺された。

マトヴェーエフ、ニコライ・ニコラエヴィチ (Матвеев Николай Николаевич, 著名)

Матвеев-Бодрыи; ウラジオストク一八九一、デットソコエ・セロー(現在プーシキン市)、一九七九)、詩人、作家、地理学研究者、ジャーナリスト、郷土研究者。ロシアの有名な詩人、マトヴェーエヴァ・ノヴェツラの父親。

作品 《Поэт-партизан Константин Ростий», Владивосток, 1926. 『コンスタンチン・ロスリー、詩人、ゲリラ』ウラジオストク、一九二六

《Русская Девочка и японская поэтесса». Даты написания неизвестны.

Хабаровский краевой краеведческий музей им. Продекова, фонд 10, опись 285.

「ロシアの女の子と日本の女子詩人」、初発未定、ハバロフスク国立郷土博物館の N・マトヴェーエフの資料館、資料蔵 10、記録 285。

マトヴェーエフ、ヴェネディクト・ニコラエヴィチ (Матвеев Венедикт Николаевич, 著名 «Марл» (マルト、ロシア語で「三月」、未来主義者、詩人、翻訳家、ジャーナリスト。

一九一六年に第一次世界戦争の現場で負傷し、回復した後、ペトログラッド（旧ペテルブルグ市）で自作の詩集『小唄』を出版した。ウラジオストクで活躍した未来派の文芸会「創造」の会員、一九一八年に訪日し、東京に通訳者の金田常三郎とともに与謝野夫妻の自宅を訪問した。この訪問に基づいて、『極東の自然と人々』という雑誌に「現代日本の詩人」を載せた。一九一九〜一九二六年に中国のハルビンに亡命したが、帰国した。モスクワ、キエフで活躍した。一九三七年に「日本のスパイ」として逮捕、銃殺された。

作品 「Песенцы», Петроград, 1916. 『小唄』ペトログラッド（旧ペテルブルグ）、一九一六年；「Черный Дом», «Песенцы», Владивосток, Чита, 1917. （『黒い家』『小唄』ウラジオストク、チタ、「境にて」出版社、一九一七年）

マトヴェーエフ、ザンギヴィリド・ヴェネディクトヴィチ (Матвеев Зангильди Венедиктович, 著名 Иван Елагин、ウラジオストク、一九一八〜ピットスブルグ、一九八七)、ロシアの亡命詩人、ピットスブルグ大学の教授。ウラジオストクに生まれ、両親とともに中国、ソビエトロシアのモスクワ、キエフへ移住し、父マトヴェーエフ・ヴェネディクトの逮捕の後で浮浪者となっていたが、第二次世界戦争前で医学学校に入学した。戦争の時に妻アルヌステイ・オリガとドイツに移住し、戦争後アメリカで亡命した。ピット

スブルグ大学を卒業し、文学博士学位を獲得した。一生涯ロシア語で詩を作ったり、英語の翻訳をしたりした。Steven Vincent Bene “The body of John Brown”の翻訳のおかげでアメリカの読者の中で好評を得ていた。

作品 Steven Vincent Bene “The body of John Brown”の翻訳。

グリゴリエフ、ミハイル・ペトロヴィチ (Григорьев Михаил Петрович, ザカスピ州ネルヴ、一八九九〜大連、一九四三)、日本学者、翻訳家。チタ陸軍士官学校で日本語を学び始め、日本陸軍特務機関付となって日本語研修のため一九二〇年に日本に派遣された。東京に居住し、日本女性・荒川綾(詩人・川路柳虹の妹)と結婚。一九二一〜一九三〇年には日本陸軍参謀本部でロシア語を教えた。『東洋にて…東洋諸民族の文化の諸問題を論ずる不定期の叢書』(一九三五年)の編集者。一九三九年にハルビンの南満州鉄道株式会社に就職し、同社の雑誌『東方評論』に川端康成、谷崎潤一郎、志賀直哉など数多くの日本文学作品のロシア語訳を発表した。

作品 M・グリゴリエフ「翻訳家の苦心」『月刊ロシア』(“Monthly Russia”, 1936).

『東洋にて 東洋諸民族の文化の諸問題を論ずる不定期の叢書』東京、大衆堂書店、一九三

五、M・グリゴリエフ編

翻訳作品『東洋にて』一九三五年 (《Ha Bopoke», 1935) : 石川啄木の詩 (『あゝがれ』の「マカロフ提督追悼の詩」と短歌 (『一握の砂』より)、芥川龍之介『蜘蛛の糸』、『山鳴』谷崎潤一郎『陰翳礼讃』: 夏目漱石『坊ちゃん』、『吾輩は猫である』、『三四郎』、『門』)

左近毅 「ミハイル・ペトロヴィチ・グリゴリエフ。北からのラフカディオ・ハーン」  
再論『Sever』二〇〇二年十二月

注

- 一 岡井隆、『ネフスキイ』（二〇〇六）より三七九〜三八〇頁
- 二 藤本和貴夫、二〇〇二年
- 三 同右
- 四 同右
- 五 A・デイボフスキー、「極東ロシアにおける日本研究と日本語教育の行方―東洋学院（1899-1920）の日本学を中心に―」
- 六 E・スバルヴィン、『横目で見た日本』二二六五〜二二六六頁
- 七 A・デイボフスキー、同右
- 八 藤本和貴夫、同右
- 九 同右
- 一〇 ベリアエバ、一一四頁
- 一一 Ernest Francisco Fenolosa（一八五三〜一九〇八）、アメリカの東洋美術の研究者・哲学者。Ezra Weston Loomis Pound（一八八五〜一九七二）、詩人・音楽家・批評家。Ezra Pound「エズラ・パウンド」序文「一九一八年」『詩の媒体としての漢字考』一頁
- 一二 ベリアエバ、一四四〜一五五頁

- 一三 コンスタンチン・バリモント：尾瀬敬止訳、『日本を歌へる』七頁
- 一四 Аздовский К. М., Дьяконова Е. М. Балмонт и Япония (アザドフスキー К., Дьяконова Е., 『象徴主義の詩人コンスタンチン・バリモントと日本』、一九九一年) 一〇三頁
- 一五 同右、二五〜二六頁
- 一六 コンスタンチン・バリモント：尾瀬敬止訳、『日本を歌へる』一四六頁
- 一七 井関正照、『未来派 イタリア・ロシア・日本』三五九頁、さらに、『極東ロシアのモダニズム 1918-1928』展』一八六〜一九三頁
- 一八 同右、一九八頁
- 一九 『極東ロシアのモダニズム 1918-1928』展』一二七頁
- 二〇 D・ブルリユーク、『未来派とは？答へる』（木下秀（一郎）と共著）九頁
- 二一 D・『富士登山 現代日本の暮らし』五頁
- 二二 Евдаев Н. Давид Бурлюк в Америке: материалы к биографии (N・エウダエフ『アメリカに生きたダビッド・ブルリユーク 伝説に関する資料』三九六頁
- 二三 同右、四〇一〜四〇二頁
- 二四 『東洋にて』一九三五年、五二〜五四頁
- 二五 グルースキナ、Anna（一九〇四〜一九九四）一九二〇年代に日本に留学した『万葉集』の露訳家。

- 二六 V・マトヴェーエフ、「現代日本詩人」『極東の自然と人々』一九一八年 1号。『みだれ髪』の第三  
七首の翻訳（「たまぐらに髪のひとつぢぎれし音を小琴と聞きし春の夜の夢」）。
- 二七 V・マトヴェーエフ、「Tanka（短歌）」『極東の自然と人々』一九一八年 1・2号。
- 二八 小川亭作「啄木の露訳について」『月刊ロシア』、一九三六年、十一月、八三頁

## 発表を終えて

最近、グローバル文化と「グローバル」文化の共通点に関する様々な研究プロジェクトが動き始めましたが、アジア太平洋領域にも、特に極東ロシアまでトランスナショナリズム、トランスナショナルな文学が少しずつ入り始めました。ロシア国籍である私は、自分のアイデンティティーについてよく考えたほうがいい、と自分自身に言いたいです。そのために、5年前に在日ロシア人研究会の例会に出席できましたし、他の研究者とともに、日本に長い間住んでいる亡命人と意見交換をすることができました。今年一年は国際日本文化研究センターで、1920～30年代に日本と中国で暮らしていた亡命ロシア人の作品について考えていました。このプロジェクトは、普通行っている文学評論よりもっと人間的な付き合いに近づいていくことも分かりました。今年一年間いろいろと教えていただきました日文研の教授（特に、指導者の劉建輝先生、隣の研究室と隣国の代表者、呉京煥先生、セミナーと研究会のリーダーでいらっしゃる鈴木貞美、稲賀繁美先生たち）、研究員、研究協力部の皆さん、大学院生のおかげで、私の研究はある程度進んだと信じています。

在日ロシア人の研究者も、いつも私の勉強を応援してくれています。ロシアの図書館、資料館が日本へのサービスまで展開していないという残念な事実は認めますが、今回、早稲田大学（E. SchteinとA. Vannovskyのコレクション）と北海道大学スラブ研究センターの図書館で古書と珍しい書類が拝読できたのは、読書に夢中になっている私には思いがけないことでした。

近代短歌の専門家にも心から感謝の意を表させていただきたいと思います。今年の研究は短歌そのものから離れていたもので、5年前にご指導いただいた上田博、古澤夕起子先生たちに短歌会に誘っていただきまして、非常にうれしいことでした。もう10年ぐらいのお付き合いになる大阪・堺市の与謝野晶子倶楽部の皆さんともまたこの一年ご一緒することができ、ウラジオストクの与謝野晶子記念文学会の活動にも役立つと思います。さらに、去年11月20日に好きな歌人たち、与謝野寛と晶子のお嬢さんである森藤子さんと直接お目にかかるともできました。すべての夢が現実となっていると言えますが、研究者の責任がより重くなって、より意義深くっていると理解しています。

